

▲対談「自分史を語ろう」

7月1日(日)・15日(日)

館長佐木隆三がホスト役を務める対談「自分史を語ろう」を開催しました。

北九州市自分史文学賞をはじめとする「自分史文学」の情報発信拠点として、様々な分野で活躍する市民の方に自分史をお話しいただきました。

【第一回】

*お話し吉村利子さん

(株式会社タチバナ菓子機
代表取締役)

記念すべき第一回目のゲストの吉村利子さんは、終戦直後から現在まで六十年以上にわたって、北九州の町工場からポン菓子機の製造と普及に尽力されています。

今回の対談では、ポン菓子機の原型である穀類膨張機との衝撃的な出会いや、当時の女性としては珍しい物理学を専攻した経緯、教員として教壇に立った小学校での苦勞：などなど、ポン菓子機に携わる以前のお話からじっくりと聞かせていただきました。そのほか、職人だった



吉村利子さん

亡き夫との思い出や、七十針を縫う大怪我を負いながらも工場に立ち続けた体験など、ポン菓子機製造の傍ら製鉄の下請けとして工場を切り盛りしていた時期についても、ユーモアたっぷりにお話ししてくださいました。

ポン菓子機の実演活動を通して日本のみならず世界を飛び回っている吉村さんだけに、各地で出会った子どもたちについて話が及ぶと、「世界にはいろんな国があって、どれだけ言葉が違っても顔が違ってても、どこかで通じている」と、満面の笑顔。その表情が、ポン菓子機製造のきっかけとなった「子どもたちに消化の良い食べ物をお腹

いっぱい食べさせてあげたい」という情熱に六十年経った今も変わりはないことを伝えていました。

会場には、工場時代の吉村ご夫婦を知る方々も多数来場され、時に笑い、時に涙ぐみながら、皆さん懐かしそうに吉村さんのお話に聞き入っていました。

参加者四四人

【第二回】

*お話し本村義雄さん

(児童文化車くまごろう号主宰
北九州児童文化連盟副会長)

当日は、台風が通り過ぎたばかりの生憎の雨模様。しかし、「くまごろう号さん」こと本村義雄さんが話し始めた途端、その朗らかな声に引き寄せられるように人が集まり、あつという間に会場はたくさんの方で埋め尽くされました。

児童文学の口演活動で知られる本村さんが初めて「口演活動をしながらか国を行脚したい」との夢を持ったのは、まだ十代だった小倉師範学校時代。その夢が「くまごろう号」という形となって結実したのは、それか

ら四十年近く経った五十五歳のとき。時に第一回ゲストの吉村さんから購入したポン菓子機を相棒にしながら、日本全国を回ることに五回。訪れた市町村は、一四六〇箇所を超えました。

そんな本村さんを傍で支え続けたのが、同行した妻の淑子さん。様々な困難が伴うことも多い旅の最中であって、「幸せのメガネをかけて旅をしましょう」「お会いする一人一人の方から素晴らしい色糸を一本ずついただいで、錦織に織り上げてゆくような旅にしましょう」といった淑子さんの前向きな言葉が、本村さんにとって大きな力になったそうです。



本村義雄さん

妻の淑子さんをはじめ、人生の節々で出会った恩師、活動に理解を示してくれた上司：多くの素晴らしい仲間にも恵まれ、長い時間をかけて十八歳の時から夢を実現させることができたご自身について、「ラッキーボーイですな」と笑ってみせた本村さん。その表情はまさに、日本中で慕われる「くまごろうさん」そのものでした。

参加者四一人

▲「自分史ギャラリー」

展示入れ換えのご案内

「北九州市自分史文学賞」歴代受賞作の中から一作品を取り上げて、その作品世界を展示で紹介する自分史ギャラリーが、十一月十日から模様替えます。

今回取り上げるのは、平成十二年度自分史文学賞で佳作と北九州市特別賞をW受賞した山田辰二郎さんの「門司発沖縄行き〇の一列車発車」です。鉄道のない沖縄にSLを贈ろうと奮戦した鉄道マンの自分史。この機会に、「自分史文学」の面白さと奥深さを是非、体験してください。